第七講　文整序問題解法　30分

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

二〇〇六年にある種社会的な話題となった映画『ALWAYS――三丁目の夕日』では、一九五八年という、高度経済成長始動期の東京を舞台としている。この映画のほとんどキャッチコピーのように流布した評語は、「未来を信じる」「人びとが未来を信じていた時代」というものであった。「未来を信じる」ということが、過去形で語られている。一九五八年と、二〇〇六年という五〇年位の間に、日本人の「心のあり方」に、見えにくいけれども巨大な転換があった。

一九五〇、六〇、七〇年代くらいまでの青年たちにとって、現在よりもずっとすばらしい未来、よい未来、ゆたかな未来が必ず来るということは、ほとんど当然の基底感覚であった。それがどのようにすばらしい未来であるかについて、さまざまなイデオロギーやヴィジョンが対立し、闘われていた。二一世紀の現在、このような「未来」を信じている青年は、ほとんどいない。人びとの生きる世界の感覚の基底の部分に、［A］はあった。

この時期の日本人の精神変容の方向性を、何か客観的な数字のようなもので確認することができるだろうか？

　日本人のものの考え方、感じ方の変動を、統計学的に信頼しうる規模と方法論とをもちいて跡づけてきた、ほとんど唯一といってよい資料として、一九七三年以降五年ごとに行われてきた、ＮＨＫ放送文化研究所による「日本人の意識」調査のデータがある。

　二〇〇八年に至る三五年間の変化を全体として見わたしてみると、その変化の「内容」に至る手前のところで、まず変化の「外形」において、おどろくべき「発見」に遭遇してしまう。

　現代日本を構成する「世代」を原則一五年ごとに、「戦争世代」「第一次戦後世代」「団塊世代」「新人類世代」「団塊ジュニア」「新人類ジュニア」としたとき、各世代の各時点の意識の変化は最近になるほど接近している。つまり、「戦争世代」と「第一次戦後世代」と「団塊世代」の意識はそれぞれ大きく離れているが、「団塊世代」と「新人類世代」は少し接近し、「新人類世代」と「団塊ジュニア」は一部重なり、「団塊ジュニア」以後はほとんどまじりあっているということである。現在における世代間の精神の「距離」を測定すると、「新人類」以降の世代に差異がなくなってきていることが、端的にわかる。ハイティーン（一六―一九歳）とその親の世

代との「親子の距離」を測定すると、一九七〇年代にあった大きな「世代の距離」が八〇年代末には著しく減少し、今世紀に入ってほとんど「消失」している。

この発見はコロンブスの卵であって、言われてみればだれでも納得するというより、あたりまえのことだと思う。七〇年代以降の生まれの世代の間で感覚の差異がなくなってきていることは、ファッション界でも教育の現場でも、商品開発の現場でも語られていることであって、すこしも新しい発見ではない。

けれども少なくとも「団塊世代」までは、歴史というものは「加速度的」に進展するということを、当然の感覚のように持っていた。「近代」は古代・中世よりも変化の急速な時代であり、近代の中でも、一八世紀より一九世紀、一九世紀より二〇世紀は、変化の激しい時代であった。二〇世紀でも、一九七〇年代くらいまでは最近の一〇年はその前の一〇年よりも変化が早い、という時代の連続であった。「歴史は加速する」というこの感覚には、客観的な根拠もあった。エネルギー消費量だけでなく、人間活動の様々な分野をグロスにしてみると、歴史はたしかに「加速度的」に進展してきた。だからこの三〇年間の、世代の意識の変化の「減速」あるいは「停止」、つまり歴史のある基本的な部分の、「減速」あるいは「停止」

ということは、「歴史」というもののあり方自体の、ある変容を表示しているように見える。

　だがそれにしても我々は、ここで奇妙な「矛盾」を見ている。冒頭我々は変化の「巨大」であることを示唆する挿話から出発してきた。けれども統計数字が示すのは、変化が「減速」し、ほとんど「停止」しているように見えるということである。変化が「巨大」であるという事実と、変化が「小さくなっている」という事実は、どのように統一的に把握することができるだろうか。

　それは「現代」という時代を現実に構成している矛盾――①二つの力の方向性（ベクトル）の拮抗するダイナミズムを見ることをとおしてはじめて把握することができる。この「現代」という時代を決定している二つの方向線は、人間の歴史の全体の中で「現代」を定位してみる時にはじめて、明確に見えてくるものである。

　一九七〇年代までの人びとの歴史意識は、というよりも「自明」のように前提されていた歴史感覚は、歴史というものが「加速度的」に進歩し発展するという感覚であった。この感覚には客観的な根拠があった。例えばエネルギー消費量の、加速度的な増大という事実に、それは裏付けされていた。けれども少し考えてみると、このような加速度的な進展が、永久に

続くものでないことは明らかである。一九七〇年代ローマクラブの『成長の限界』以来すでに多くの推計が示しているとおり、人類はいくつもの基本的な環境資源を、今世紀前半の内に使い果たそうとしている。われわれのミレニアムは、二〇〇一年九月一一日世界貿易センタービルへの爆破テロによって開幕しているが、ハイジャック犯によってビルに激突する数分前の航空機にわれわれの星は似ているのであって、どこかで方向を転換しなければ、このまま進展する限り破滅に至るだけである。

一定の環境条件の中に、たとえば孤立した森の空間に、この森の環境要件によく適合した動物種を新しく入れて放つと、初めは少しずつ増殖し（第Ⅰ期）、ある時期急速な、時に「爆発的」な増殖期を迎え（第Ⅱ期）、この森の環境容量の限界に接近すると、再び増殖を減速し、やがて停止して、

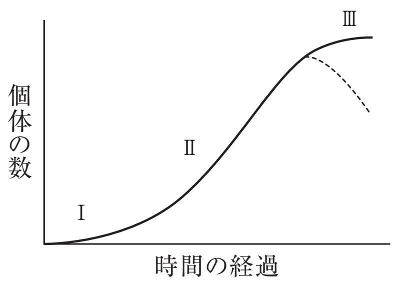
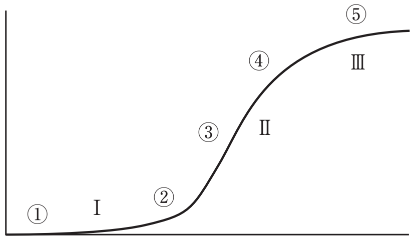


図１　ロジスティック曲線

Ⅰ：大増殖以前期
Ⅱ：大増殖期
Ⅲ：大増殖以後期（安定平衡期）



①：［Ⅰ］	（定常期）	原始社会
②：［Ⅰ→Ⅱ］	（過渡期）	〈軸の時代〉Ⅰ
③：［Ⅱ］	（爆発期）	文明／近代社会
④：［Ⅱ→Ⅲ］	（過渡期）	〈軸の時代〉Ⅱ現代
⑤：［Ⅲ］	（定常期）	未来社会

図２　人間の歴史の３つの局面

安定平衡期に入る（第Ⅲ期）。

生物学者がロジスティック曲線と呼ぶS字型の曲線（図1の実線）である。これは成功した生物種であり、ある種の生物種は図1の点線のように、繁栄の頂点の後、滅亡にいたる。これを「修正ロジスティック曲線」と呼ぶ生物学者もある。再生不可能な環境資源を過剰に消費してしまったおろかな生物種である。哺乳類などの大型動物はもっと複雑な経緯を辿るが、基本の原則を免れることはできない。地球という有限な環境下の人間という生物種もまた、このロジスティック曲線を免れることはできない。

②これは比喩でなく、現実の構造である。

一九六〇年代には地球の「人口爆発」が主要な問題であったけれども、前世紀末には反転して、ヨーロッパや日本のような「先進」産業諸国では「少子化」が深刻な問題となった。「南の国々」を含む世界全体は未だに人口爆発が止まらないというイメージが今日もあるが、実際に世界全体の人口増加率の数字を検証してみるとおどろくことに、一九七〇年を尖鋭な折り返し点として、それ以後は急速にかつ一貫して増殖率が低下している。つまり人類は理論よりも先にすでに現実に、生命曲線の第Ⅱ期から第Ⅲ期への変曲点を、通過しつつある。この時点からふりかえってみると、「近代」という壮大な人類の爆発期はS字曲線の第Ⅱ期という、一回限りの過

渡的な「大増殖期」であったことがわかる。そして「現代」とはこの「近代」から、未来の安定平衡期に至る変曲ゾーンと見ることができる（図２）。「現代社会」の種々の矛盾に満ちた現象は、「高度成長」をなお追求しつづける慣性の力線と、安定平衡期に軟着陸しようとする力線との、拮抗するダイナミズムの種々層として統一的に把握することができる。

われわれの見てきた矛盾、「巨大な転換があった」という事実と、「変化は減速し、小さくなっている」という事実との間の矛盾を、われわれはいまや解くことができる。われわれは変化の急速な「近代」という爆発期を後に、変化の小さい安定平衡期の時代に向かって、巨大な転回の局面を経験しつつある。この展開の経験が、「現代」という時代の本質である。

二〇世紀の後半は、「近代」という加速する高度成長期の最終の局面であった。この最終の局面の拍車の実質を支えていたのは、〈情報化／消費化資本主義〉のメカニズムである。〈情報化／消費化資本主義〉のメカニズムの範型は、一九二七年の歴史的な「ＧＭの勝利」であった。それ以前の古典時代の資本主義の、消費市場需要に対応する生産というシステムの王者フォードが、規格化された大量生産を通して低価格化された堅牢な「大衆車」の普及によって、自ら市場を飽和させてしまったことに対して、ＧＭは発想を逆転し「自動車は見かけで売れる」という信条の下、「デザイ

ンと広告とクレジット」という情報化の諸技法によって車をファッション商品に変え、買替え需要を開発するという仕方によって市場を「 B 」してしまう。このように〈情報化／消費化資本主義〉とは、情報による消費の自己創出というシステムの発明によって、かつて「資本主義の矛盾」と呼ばれた恐慌の必然性を克服し、社会主義との競合に勝ちぬき、二〇世紀後半三〇年余の未曾有の物質的繁栄を実現したシステムであった。GMはこの繁栄の全期間を通して、この〈情報化／消費化資本主義〉の範型でありつづけてきた。二〇〇八年このGMの突然の危機と暗転は、人間の少なくとも物質的な高度成長期の究極のシステムであるこの〈情報化／消費化資本主義〉の限界を露呈することとなった。〈情報化／消費化資本主義〉はなぜ人間の、少なくとも物質的な成長期の〈究極の形態〉といえるのか？　なぜそれは限界を露呈するのか？

〈情報化／消費化資本主義〉とは「デザインと広告とクレジット」という情報化の力によって消費市場を自ら創り出すシステムであり、このことによって旧来の「資本主義の矛盾」をみごとに克服するシステムであった。［　甲　］けれどもこのグローバルなシステムはそれがグローバルであるがゆえに、もういちど「最終的」な有限性を露呈する。

球はふしぎな幾何学である。無限であり、有限である。球面はどこまでいっても際限はないが、それでもひとつの「閉域」である。

　グローバル・システムとは球のシステムということである。どこまで行っても障壁はないが、それでもひとつの閉域である。これもまた比喩でなく現実の論理である。二一世紀の今現実に起きていることの構造である。グローバル・システムとは、無限を追求することをとおして立証してしまった有限性である。それが最終的であるのは、共同体にも国家にも域外はあるが、地球に域外はないからである。

　二〇〇八年「ＧＭ危機」は、直接にはサブプライム・ローン問題に端を発したグローバル・システムの崩壊の一環として現実化した。サブプライム・ローン問題とは、アメリカの都市の貧しい地域の住宅価格が上昇し続けるはずであるということ、地域の貧しい人びとがその住宅担保ローンの元利を支払い続けることができるはずであるということ、この仮定が確実な「現実」であるという小さな虚構を基底として、証券化に証券化を重ね、国際化に国際化を重ね、全地球的に強固な「現実」であるかのごとき相貌を獲得した巨大な虚構のシステムが、このアメリカの都市の地域の住宅需給の物体的な飽和と、人びとの生計収支の限界的な配分という生々しい現実との矛盾を破綻点として、一挙に崩壊したものである。

情報化に情報化を重ねることによって構築される虚構の「無限性」が、現実の「有限性」との接点を破綻点として一気に解体するという構図をここにも見ることができる。

二〇〇八年のグローバル・システムの危機を一九二九年の恐慌の反復とみて「百年に一度の危機」を説くのは、二〇世紀型の成長経済がやがて再開して永続するはずであるという思考の慣性を基礎としている。資本主義は自己をコントロールする技術を格段に獲得したから、それは二九年の恐慌ほどには悲惨な光景を生まないだろうが、ほんとうは③もっと大きな目盛の歴史の転換の開始を告げる年として、後世は記憶するだろう。

種の生命曲線（図１）の第Ⅱ期にある動物種にとって、たとえば森は、「無限」の環境容量として現象し、旺盛な増殖のための「征服」の対象である。種の生命曲線の第Ⅲ期にある動物種にとって、森は「有限」の環境容量として立ち現われ、安定した生を永続するための「共生」の対象として存在する。

「近代」という高度成長期の人間にとって自然は、「無限」の環境容量として現象し、開発と発展のための「征服」の対象であった。「近代」の高度成長の成功の後の局面の人間にとって自然は、「有限」の環境容量として立ち現われ、安定した生存の持続のための「共生」の対象である。

かつて交易と都市と貨幣のシステムという、「近代」に至る文明の始動期に、この新しい社会のシステムは、人びとの生と思考を、共同体という閉域から解き放ち、世界の「無限性」という真実の前に立たせた。カール・ヤスパースが「軸の時代」と名付けたこの文明の始動期の強大な思想たち、古代ギリシャの哲学とヘブライズムと仏教と中国の諸子百家とは、世界の「無限」という真実への新鮮な畏怖と苦悩と驚きに貫かれながら、新しい時代の思想とシステムを構築してきた。この交易と都市と貨幣のシステムの普遍化である「近代」はその高度成長の極限の形態である〈情報による消費の無限創出〉と世界の一体化自体を通して、球表の新しい閉域性を、人間の生きる世界の有限性を再び露呈してしまう。

　かつて「文明」の始動の時に世界の「無限」という真実に戦慄した人間は今、この歴史の高度成長の成就の時に、もう一度世界の「有限」という真実の前に戦慄する。

　宇宙は無限かもしれないけれども、人間が生きることのできる空間も時間も有限である。「軸の時代」の大胆な思考の冒険者たちが、世界の「無限」という真実にたじろぐことなく立ち向かって次の局面の思考とシステムを構築していったことと同じに、今人間はもういちど世界の「有限」という真実にたじろぐことなく立ち向かい、新しい局面を生きる思考とシス

テムを構築してゆかねばならない。

現代というもう一つの歴史の巨大な曲がり角、危機の時代を、もう一つの巨大な思考とシステムの創造の時代、新しい〈 C 〉に転化することをとおして、のりこえてゆかねばならない。

（見田宗介『現代社会はどこに向かうか』による）

問一 空欄 A に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記せ。

イ 心のあり方　　ロ 沈黙の転回

ハ 変化の外形　　ニ 精神変容の方向性

問二 傍線部①「二つの力の方向性（ベクトル）の拮抗するダイナミズム」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記せ。

イ 未来を信じる方向性と未来を信じない方向性のヴィジョンの対立が、時代をこえて存在している。

ロ 世代間で意識が大きくかけ離れていたのが、感覚の差異がなくなるというダイナミックな変化が起こっている。

ハ 歴史はこのまま進化するという感覚と、どこかで方向転換しなければ破滅に至るという感覚が両立している。

ニ 動物種に爆発的に増殖する時期と停止する時期があるように、人びとの変化にも加速する力と減速する力が働いている。

問三　傍線部②「これは比喩でなく、現実の構造である」とあるが、「現実の構造」の例として**適切でないもの**を次の中から一つ選び、解答欄に記せ。

イ　人口増加率の低下　　ロ　GM危機

ハ　ローマクラブの『成長の限界』　　ニ　百年に一度の危機

問四　空欄 B に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記せ。

イ　閉域化　　ロ　究極化　　ハ　無限化　　ニ　消費化

問五　空欄 甲 には次の四つの文が入る。正しい順序に並べ替えたとき**二番目**に来る文を選び、解答欄に記せ。

イ　けれどもこの「無限」に成長する生産＝消費のシステムはその生産の起点においても消費の末端においても、資源の無限の開発＝採取を前提とし環境廃棄物の無限の排出を帰結するシステムである。

ロ　資源を「域外」に調達し廃棄物を海洋や大気圏を含む「域外」に排出することをとおして、環境容量をもういちど無限化することができる。

ハ　この資源／環境は現実に有限であるが、この新しい有限性もまたいったんはのりこえられる。

ニ　それは消費の無限拡大と生産の無限拡大の空間を開く。

問六　傍線部③「もっと大きな目盛の歴史の転換の開始」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記せ。

イ　変化の急速な「近代」という爆発期を後に、変化の小さい安定平衡期の時代に向かい始めた。

ロ　最終的形態であるグローバル・システムが崩壊し、永続するシステムが構築できなくなった。

ハ　「軸の時代」を支えた強大な思想たちが限界を露呈し、新たな思想が生まれ始めた。

ニ　〈情報化／消費化資本主義〉が終焉を迎え、交易と都市と貨幣のシステムを普遍化できなくなった。

問七　空欄 C に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記せ。

イ　閉域性　　ロ　征服の対象　　ハ　軸の時代　　ニ　無限性

問八　本文の趣旨に合致する最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に記せ。

イ　一九七〇年代の青年たちは、親世代のいだく未来像が実現しないのにいらだち、まったく別な未来像を模索したので、世代間の断絶を戦後において最大化させた。

ロ　繁栄の頂点の後、滅亡にいたるおろかな生物種にならぬために、人類に求められるのは環境が有限であることの自覚による文明規模の縮小である。

ハ　規格化された大量生産によって大衆車を普及させたフォード・システムは、「ＧＭの勝利」後は後進国で生き延び、「ＧＭ危機」の今また復活している。

ニ　近代の高度成長期において人間に無限と認識され「征服」の対象であった自然は、高度成長期後には有限とみなされ、安定した生のための「共生」の対象となる。

問一	問二	問三	問四	問五	問六

問七

問八

第七講　文整序問題解法　解答

問一	問二	問三	問四	問五	問六
ロ	ニ	ニ	ハ	イ	イ

問七
ハ

問八
ニ